

円環モデルに基づくファミリー・マップの検討

——女子短大生のいる家族の全成員調査の結果——

永 田 忠 夫

Analysis of Family—Map:
Families of J. College Students

Tadao Nagata

I 問 題

Olson, D. H. ら (1979, 1980) は、それまでの家族研究に用いられた概念をシステム論の立場から比較分類して整理し、家族評価・家族診断に有効な概念を検討した。そして、家族システムの円環モデル (Circumplex Model) という理論的モデルを構築し、家族内の相互作用を実証できるさまざまな尺度を作成し、その妥当性・信頼性の検討を加えてきている^{6,7,8,9,10,12,13)}。

円環モデルは、凝集性および適応性の2次元と両者を促進する働きをもつコミュニケーション次元で構築されている。凝集性とは、「家族成員がお互いにもっている情緒的な絆と成員である個人が家族システムで経験する自律性の程度」と定義され、適応性とは、「状況的・発達的なストレスに対応して勢力構造・役割関係・人間関係のルールを変化させることのできる家族システムの能力」と定義される⁶⁾。2次元を構成する関連下位概念(尺度項目)は、表1に示した。

円環モデルの次元尺度の得点を測定する方法は、家族成員が直接的に円環モデルの関連下位項目を評定尺度に評定する自己報告法や臨床的観察者が評定する観察者報告法、家族成員が提示された20項目の質問に回答する質問—回答法などが使用され、質問—回答形式による家族評価測定道具としては、FACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales) [改訂版 FACES III] などがある。

カーズJ. (1981) は、オルソンの円環モデルに基づいた体験学習プログラムを実施するために、簡単に円環モデルによる家族システムの16分類を測定・図示できるファミリー・マップを開発した(図1)。表1でみるように、ファミリー・マップの概念・下位項目と円環モデルの概念・下位項目は、ほぼ同じものとしてとらえることができる。

表1 円環モデルの概念・下位項目とファミリー・マップの下位項目

Family-Map	Circumplex Model	
ADAPTABILITY: 【適応性】	Interrelated Concepts ADAPTABILITY	FACES III *Clinical Assessment
① Leadership (リーダーシップ)	Family power structure (1) Assertiveness (2) Control	Leadership
② Discipline (規律「しつけ」)	(3) Discipline	Discipline
③ Negotiation (話し合い)	Negotiation styles	Negotiation
④ Organization (まとまり)	Role relationships	Roles
⑤ Values (価値観)	Relationship rules Feedback (1) Positive (2) Negative	Rules
COHESION: 【結合力】	COHESION	*Clinical Assessment
⑥ Closeness (親密性)	Emotional bonding	Emotional Bonding
⑦ Support (相互援助)	Independence	Family Involvement
⑨ Commonality (共有性)	Boundaries Time Space	Internal Boundaries • Time • Space
⑧ Decision Making (決断)	Decision-Making	• Decision Making
⑩ Unity (統一性)	Friends Interests and Recreation	External Boundaries • Friends • Interests • Recreation
	Coalitions	Marital Relationship Parent-Child Coalitions

ファミリー・マップの下位項目の意味内容は次のようである。①リーダーシップ：家族の目標設定と方向づけがどのように決定されるか（専制的・権威主義的か、民主的・リーダー無しか）、②しつけ「規律」：親が子どもに対してどのような許容範囲を設定するか（厳しいか、甘い）、③話し合い：家族の問題を解決したり計画を立てるための話し合いや相談をする形式はどうか（話し合いが制限されるか、皆の意見が尊重されるか）、④まとまり：家族が重大な問題に直面したとき、いかに家族がまとまりを整え組織的に対処していくか（まとまりがありすぎるか、まとまりがないか）、⑤価値観：家族が持っている価値体系が、家族の問題が生じている状況や世の中の変化にあわせて再構築していけるか（家族におけるさまざまなままりが不変であるか、その時々によってよく変わるか）、⑥親密性：家族成員間に感情的交流があり、相互に関心を示し合い、情緒的な絆が結ばれているか（親密であるか、親密でないか）、⑦相互援助：家族成員がお互いに援助したり援助されたりする交流があるか（全くないか、多すぎるか）、⑧決断（意志決定）：家族成員の個人的問題や家族の意志決定をする際に、家族全員で相談し合意の上で決められるのか、あるいは成員個人の決断で決定されるのか（決断は個人であるのか、家族全員であるのか）、⑨共有性：時間・空間・興味の対象・活動・友など家族

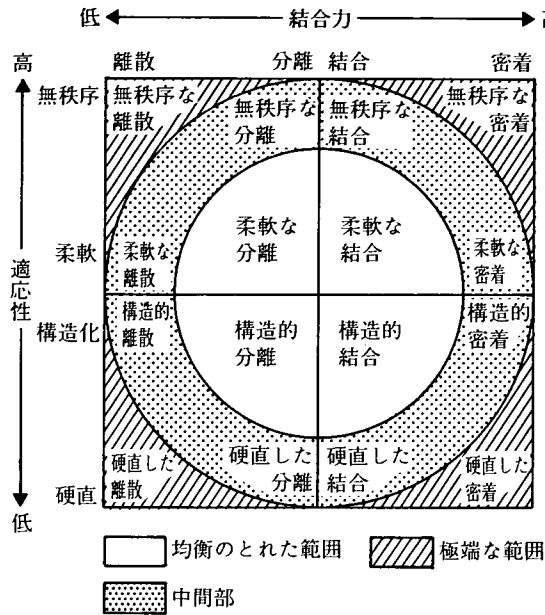


図1 ファミリー・マップの分類

が共有できることがあるのか（全く共有するものがないのか、全てのことを共有しようとするのか）、⑩統一性：家族の一員であることの誇りや帰属意識によって保たれる統一性があるか（全くないのか、統一性があるか）。

ファミリー・マップでは、家族評価・診断の測定方法として、オルソンらを用いる臨床評定尺度（Clinical Rating Scale）と同じように、直接的に次元の下位項目を評定する方法をとっている。こうした評定尺度方式は、質問一回答形式よりも調査者（観察報告者）の訓練が必要とされるが、各評定項目の左右の概念が明確になっていれば信頼度の高い資料となりうる。

さて、今回の調査は、一方で本学の授業科目「家族コミュニケーション論」の一環として、学生が自分の家族成員全員のファミリー・マップをとり、それをもとに家族成員間のコミュニケーションを高めて家族成員が「我が家族」を見直すという家族教育プログラムとして実施されたが、女子短大生のいる家族の実態を分析するデータ収集としても利用した。家族成員に調査を依頼して家族成員全員に関するデータを収集することは、そのこと事態困難であるし、家族および家族成員のプライバシーなどに触れ収集困難なことが多く、家族成員全員に関する多量のデータを分析した過去の研究が少ないので被調査者の了承を得て分析をすることにした。

本研究の分析の目的は、まずカーンズによるファミリー・マップ尺度の妥当性の検討にある。尺度の検討は、ファミリー・マップを使用することの前提であるからである。

第2に、日本においても円環モデルに基づく尺度の検討がなされているが、おもに臨床的使用尺度としての意味合いが強かったり^{10,11,12)} 高校生以下のデータの分析である²⁾。日本において、子どもの高校卒業を境にして子どもの自立を認めて個人の意見を尊重したり、あるいはそれを

認めざるを得ない状況に陥る親や現実生活をする上で自立をしたり自立せざるをえない子どもが多い。岡堂(1986)がカーターらの家族ライフサイクルにおける「青年期の子どもをもつ家族の課題」をまとめ、子どもの独立を含めて家族境界を柔軟にすること、青年が家族システムを出入りできるように親子関係を変えること、中年の夫婦関係や職業上の達成に再び焦点を合わせること、老後への関心をもつこととしているが、先にも述べたように、日本の社会では子どもが高校を卒業することがその契機となると思われる。それゆえ、高校生以降の青年期の子どもを含む家族は、親も子どもも家族の意味を問直し、家族における自己の位置づけを柔軟に変化させていく必要がある。その点で、女子短大生のいる家族という限定があるが、家族成員全体が揺れ動く家族ライフサイクルの時期の家族の実態を明らかにする意味がある。(高校を卒業し終えた青年のいる家族としては男子青年のデータが少なく偏りがある)。

第3に家族を研究する際に、家族システムあるいは家族全体をできるだけとらえた結果が必要とされる。家族の凝集性に与える要因として、家族成員の人数や子どもの年齢、親子の生活の共同性の程度、親の職業、家父長制度などの因習の残っている程度、親の家族観などが考えられ、また適応性に影響を与える要因として、家族のライフサイクルや親の職業、親の忙しさ(家族にかかわってられる時間など)、子どもの自立・独立心の程度などが考えられる。そこで、家族成員全員が個々に評価したファミリー・マップ尺度得点の平均値をその家族のファミリー・マップの尺度得点として考え、今回の調査でデータのある家族構造、家族成員の数、父親の職業、母親の職業、家族成員の構成パターンと家族ファミリー・マップの関係の分析を試みることを目的とした。

II 方 法

1. 調査手続き

調査は、1989年7月～1990年9月に実施した。調査対象は、A短期大学在学学生の243家族の全家族成員である。調査の方法としては、学生にファミリー・マップについての講義をした後、被調査者に評定尺度項目の意味内容について説明をしながら面接調査をすること、および、できる限り調査可能な家族成員に調査をするように指示した。(自分の家族のアセスメントをレポートとして課した。)学生には自分の家族成員の数だけ調査票を配った。

2. 質問紙の構成

フェイスシートおよびファミリー・マップを描くための2尺度(下位項目10項目)からなる質問紙とした。2尺度の下位項目および評定尺度は以下のようなものである。

【適応性】		ひょうに	かなり	やや	やや	かなり	ひょうに	
・リーダーシップについて	:強い(独裁的)	1	2	3	4	5	6	弱い(民主的)
・規律(しつけ)について	:厳しい	1	2	3	4	5	6	甘い
・話し合い(個人の意見の尊重)	:制限される	1	2	3	4	5	6	制限がない
・「まとまり」について	:まとまりがある	1	2	3	4	5	6	まとまりがない
・価値観について	:不変である	1	2	3	4	5	6	よく変わる

【結合力】		ひょうに	かなり	やや	やや	かなり	ひょうに	
・親密性(家族との感情交流)	:親密でない	1	2	3	4	5	6	親密すぎる
・(家族成員間の)援助	:全くない	1	2	3	4	5	6	多すぎる
・(個々人の問題の)決断	:個人である	1	2	3	4	5	6	家族全員である
・(時間・空間・興味など)共有性	:全くない	1	2	3	4	5	6	全てを共有
・統一性(家族員である誇りなど)	:全くない	1	2	3	4	5	6	全てを統一

3. 分析対象

調査票が回収された家族は243ケースであったが、少なくとも学生自身、父親、母親の3者の調査票がそろっている家族を条件に分析対象家族とした。その結果、232家族が分析対象となった。家族成員のうち、年齢が低い、拒否等で調査できなかった兄弟・姉妹のある家族が7ケースあったが、分析対象家族から除外せず欠損値のまま分析した。また、祖父母等の調査票が回収されたケースが少なかったので祖父母等の資料は分析から除外した。

結果、分析対象家族成員の総計は956人となった。

《分析対象家族および家族成員の特徴》

(1) 家族形態と家族構成

家族形態としては、2世帯家族が、164家族、3世帯家族が66家族、その他親戚の人の同居などを含む家族2家族であった。女子短大生を中心とした家族構成パターンを分類すると表2のようであった。なお、家族構成パターンは調査時現在同居している家族成員(被調査者)によって分類した。(調査不能の構成員があり、若干実態とは異なると思われる。)

(2) 家族成員の年齢

女子短大生を基準とした家族成員(続柄名)の平均年齢とその範囲を表3に示した。女子短大生のいる家族を対象としているので、私(20歳は1名)が子どものうちでも突出している。また、家族成員のうち姉よりやや兄の数が少ないのは、独身ではあるがすでに家を出て住んでいる青年が姉に比べて多いことが影響している。弟が少ないのは、調査不能者が影響している。

(3) 父親と母親の職業

父親が被雇用者、母親が無職の組み合わせ(夫はお勤め、妻は専業主婦)が全体の半数(50.9%)で、なんらかのかたちで共稼ぎしている夫婦は32.8%であった。

表2 分析対象家族の調査時家族構成パターン

家族構成のパターン	家族数
1. 父・母・私	25
2. 父・母・私・兄1	38
3. 父・母・私・姉1	37
4. 父・母・私・兄1・兄2	5
5. 父・母・私・兄1・姉1	9
6. 父・母・私・姉1・姉2	6
7. 父・母・私・兄1・弟1	3
8. 父・母・私・兄1・妹1	2
9. 父・母・私・姉1・弟1	6
10. 父・母・私・姉1・妹1	4
11. 父・母・私・弟1	38
12. 父・母・私・妹1	42
13. 父・母・私・弟1・弟2	3
14. 父・母・私・弟1・妹1	5
15. 父・母・私・妹1・妹2	8
16. 父・母・私・姉1・弟1・弟2	1

表3 分析家族成員の年齢

家族成員	標本数	平均(標準偏差)	範囲[最小値-最大値]
父親	232	49.64(3.71)	41-62
母親	232	45.97(3.46)	38-59
兄(兄1+兄2)	62	22.73(2.03)	20-28
姉(姉1+姉2)	69	22.12(2.18)	19-29
私	232	18.31(0.47)	18-20
弟(弟1+弟2)	60	15.37(1.53)	10-18
妹(妹1+妹2)	68	15.77(1.40)	12-19

表4 父親の職業と母親の職業

[()は%]

父親の職業 母親の職業	父親の職業				母親の職業：計
	被雇用者	会社役員	自営業	無職・その他	
被雇用者	32(13.8)	1(0.4)	4(1.7)		37(15.9)
会社役員		4(1.7)			4(1.7)
自営業	5(2.2)	1(0.4)	29(12.5)	1(0.4)	36(15.5)
無職・その他	118(50.9)	16(6.9)	19(8.2)	2(0.9)	155(66.8)
父親の職業：計	155(66.8)	22(9.5)	52(22.4)	3(1.3)	232(100)

Ⅲ 結果および考察

1. ファミリー・マップ尺度の検討

ファミリー・マップにおける適応性・結合力という2次元の尺度の妥当性を検討するために、全分析対象家族成員（956名）の尺度構成項目評定点をもとに因子構造を検討し、また、尺度得点間および尺度得点と下位項目評定点の相関を算出した。

(1) ファミリー・マップ項目の因子構造的検討

ファミリー・マップにおける2次元、「適応性次元」と「結合力次元」がそれぞれの因子として抽出できるかを検討するために、適応性尺度および結合力尺度を構成する10項目について因子分析（主因子法、共通性の推定値=1）をおこなった。回転前の固有値が3.08, 1.62, 0.93, 0.78, となり、1.0以上の因子は2因子であり、第Ⅱ因子と第Ⅲ因子以下の因子との間に落差がみられるので、2因子を抽出してバリマックス法で回転させた。その結果が表5である。

表5 家族マップの次元（適応性・結合力）の検討
—因子分析結果：10項目—

項目	因子		
	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	共通性(h ²)
①リーダーシップ	.05	.73	.54
②しつけ	.16	.70	.51
③話し合い	-.13	.66	.46
⑤価値観	.24	.43	.24
⑥親密性	-.79	.05	.63
⑩統一性	-.76	-.14	.60
⑦相互援助	-.68	.05	.47
⑨共有性	-.64	.01	.41
⑧意志決定	-.56	-.05	.31
④まとまり	.70	.22	.54
因子寄与 (Σa ²)	2.98	1.72	4.70
因子寄与率 (%)	29.80	17.21	47.01

表5の示すように、⑥親密性、⑩統一性、⑦相互援助、⑨共有性、⑧意志決定の5項目は、第Ⅰ因子の因子負荷量が、-.55以上で、第Ⅱ因子の因子負荷量が、.15以下であった。第Ⅰ因子は、ファミリー・マップの「結合力次元」と一致すると考えられる。

第Ⅱ因子については、①リーダーシップ、②しつけ、③話し合いの3項目が因子負荷量.65以上で、しかも第Ⅰ因子の負荷量が.16以下であり、第Ⅱ因子への寄与率が高かった。この3項目は、勢力構造に関する項目群である。⑤価値観は、.43と因子負荷量がやや低い、第Ⅰ因子への寄与率と比べるとかなり高い。この項目は、さまざまな家族の課題に柔軟に対処する発想をもつことができるかどうかを測定する項目である。したがって、ファミリー・マップの

「適応性次元」としてこの項目群を解釈すると家族成員の個々人としての独立性・自律性を尊重した対等関係で家族の課題に柔軟に対処するというよりは、親の一貫した指導—子ども追従型の勢力構造を基盤とした親主導型の適応性を意味していると考えられる。

ところで、④「まとまり」は、第Ⅰ因子の負荷量が前の5項目と正負が逆であるが、.698と高い。「まとまり」については、家族が組織化・構造化され秩序づけられた関係があることとして説明したが、学生を含む調査対象者に情緒的な関係でまとまっていること（心理的に一体化している）と解釈されてしまったため、結合力次元すなわち第Ⅰ因子の因子負荷量が高かったと考えられる。

第Ⅰ因子を縦軸に、第Ⅱ因子を横軸に負荷量をプロットしたものが、図2である。これをみると④「まとまり」が遊離していることがわかる。

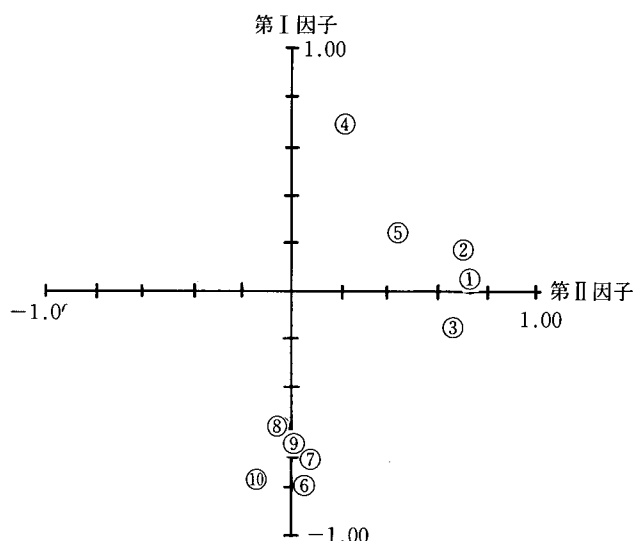


図2 因子負荷量のプロット (10項目)

円環モデルにおける適応性について、黒川 (1990) は、FACES III の和訳を検討し、また、岩橋 (1988) の FACES II 和訳の結果をふまえて、日本の社会に西洋的な適応性の概念をそのまま導入することに疑問を投げかけている。本研究の結果も日本における「状況的、発達的な家族課題に対する家族成員の対処の仕方」の測定道具の検討が今後必要であることを示唆している。

(2) 結合力次元および適応次元の検討

ファミリー・マップの「結合力次元」を構成している項目の内部整合性をみるために、⑥⑦⑧⑨⑩の5項目について主成分分析をおこなったところ、固有値が2.51, 0.77, 0.73となり、固有値が1.0以上で第2成分以下の成分との落差も大きく、主成分負荷量が、.60以上の値となっ

ており、1つの尺度として斉一性があることが確認された(表6)。

この結果、本研究のファミリー・マップの第1の尺度は、⑥親密性、⑦相互援助、⑧意志決定、⑨共有性、⑩統一性、の5項目で構成し、新たに『凝集性尺度』と名づけた。

同じように、ファミリー・マップの「適応性次元」を構成している5項目①②③④⑤について主成分分析をおこなった。その結果、固有値が1.81, 1.07, 0.78, 0.71となった。そこで、第1主成分の負荷量が最も低く、また(1)の10項目での因子分析の結果、結合力の尺度に属すると考えられる④「まとまり」を除外して、4項目で再度主成分分析をおこなった。その結果、固有値が1.69, 0.94, 0.72となり成分1の主成分負荷量も.49以上となったので、④「まとまり」を除外し、①リーダーシップ、②しつけ、③話し合い、⑤価値観、の4項目で構成することが妥当であるとした。

この4項目で構成する新しい第2の尺度名を『指導性尺度』とした。

表6 凝集性尺度・指導性尺度の検討(主成分分析)

凝集性尺度(5項目)		指導性尺度(4項目)	
項目	成分1	項目	成分1
⑥親密性	.80	①リーダーシップ	.74
⑩統一性	.77	②しつけ	.72
⑦相互援助	.70	③話し合い	.61
⑨共有性	.66	⑤価値観	.49
⑧意志決定	.60		
固有値	2.51	固有値	1.69
寄与率(%)	50.16	寄与率(%)	42.20

(3) 『凝集性尺度』と『指導性尺度』の独立性の検討

まず、新しく名づけた『凝集性尺度』および『指導性尺度』の独立性を相関によって検討した。2尺度が相互に独立した次元の尺度であるためには、一方の尺度下位項目評定点および尺度得点は、他方の尺度得点とは低い相関をもつことが必要である。相関係数を求めたところ、表7に示すように、無相関検定では有意な相関がある項目もあるが、その係数は、.2以下であり、実質上はほとんど相関がないといえる。両尺度は独立した次元の尺度と考えられる。

表7 2尺度間の下位項目評定点および尺度得点の相関

凝集性尺度	指導性得点との相関	指導性尺度	凝集性得点との相関
⑥親密性	-.066 *	①リーダーシップ	-.083 *
⑦相互援助	-.070 *	②しつけ	-.151 ***
⑧意志決定	-.094 **	③話し合い	.038
⑨共有性	-.077 *	⑤価値観	-.173 ***
⑩統一性	-.191 ***		
凝集性得点	-.139 ***	指導性得点	-.139 ***

[無相関の検定: 自由度=954, *** p < .001, ** p < .01, * p < .05]

つぎに、新尺度『凝集性尺度』と『指導性尺度』の因子構造をあらためて(1)の因子分析と同じ方法で検討した結果が、表8である。回転前の固有値は、2.64, 1.62, 0.93, 0.78であり、バリマックス回転後の因子負荷量もわりにきれいに2つの因子に別れた。第I因子と第II因子の負荷量をプロットしたのが図3である。因子構造的にも『凝集性尺度』と『指導性尺度』の独立性が確保されていると考えられる。

表8 ファミリー・マップの再構成次元（凝集性・指導性）の検討
—因子分析結果：9項目—

項目	因子	第I因子	第II因子	共通性(h^2)
①リーダーシップ		-.04	.74	.55
②しつけ		-.14	.70	.51
③話し合い		.15	.66	.46
⑤価値観		-.23	.44	.24
⑥親密性		.80	.02	.64
⑩統一性		.76	-.16	.59
⑦相互援助		.71	.02	.50
⑨共有性		.66	-.01	.43
⑧意志決定		.57	-.07	.33
因子寄与($\sum a^2$)		2.57	1.70	4.26
因子寄与率(%)		28.52	18.86	47.38

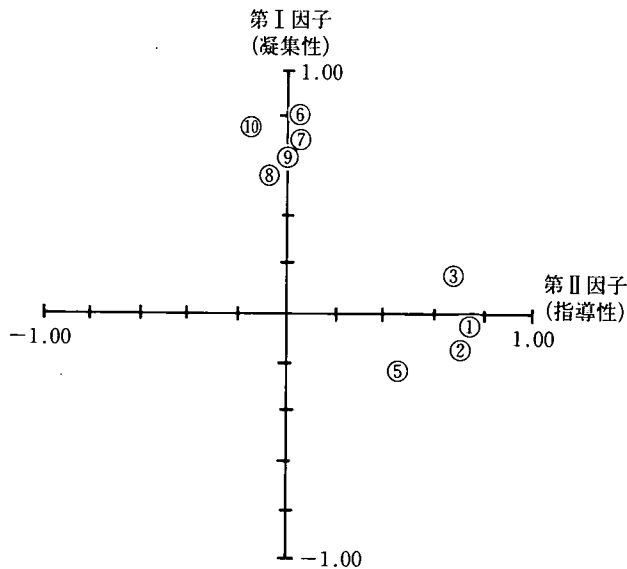


図3 因子負荷量のプロット（9項目）

(4)凝集性尺度得点と指導性尺度得点の特徴

凝集性尺度を構成する5項目の評定点の合計点を凝集性尺度得点、指導性尺度を構成する4尺度の評定点の合計点を指導性尺度得点とした。基本統計量およびヒストグラムを図4に示した。凝集性と指導性を2次元とするファミリー・マップは、凝集性次元の横軸が5点から30点（軸の原点となる得点、17.5点）、指導性次元の縦軸が4点から24点（軸の原点となる得点、14点）でプロットされる。したがって、縦軸と横軸を同じ長さのファミリー・マップを描くと横軸と縦軸の1点の比は4：5となる。女子短大生のいる家族成員全員の平均値をファミリー・マップにプロットすると第IV象限すなわち構造的・結合的家族の位置になる。第IV象限は依存的な子どもを保護的に育てる家族に適していると考えられる¹⁾。自立した子どもを含む家族ライフサイクルであると考えられる女子短大生のいる家族システムを考えると、子どもを家族システムの中に閉じこめている環境であると思われる。

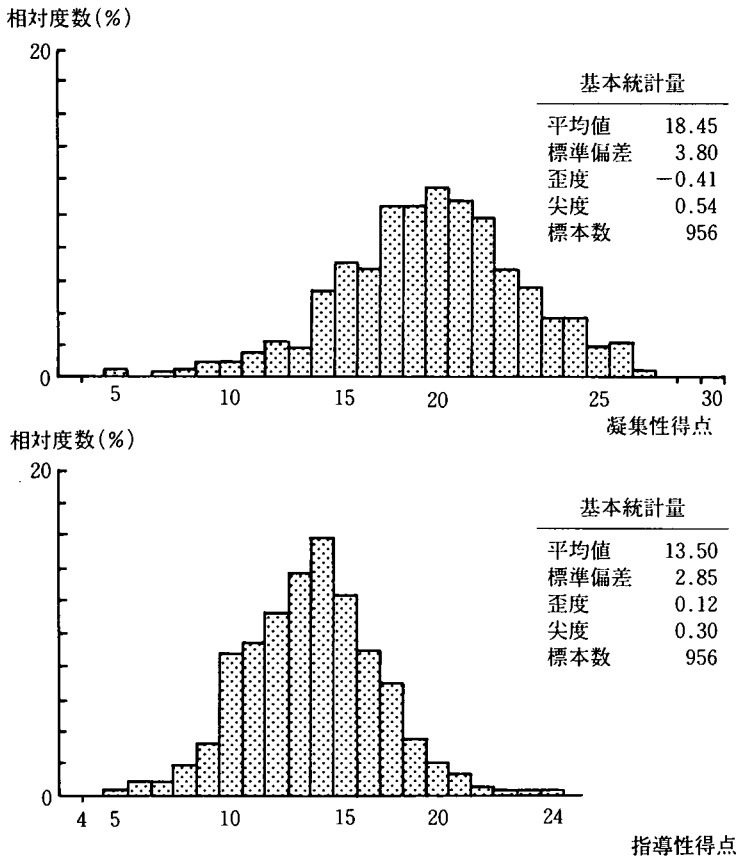


図4 凝集性得点・指導性得点のヒストグラムと基本統計量

2. 各家族成員のファミリー・マップ

(1) 父親と母親の評定したファミリー・マップの比較

家族の評価が父親と母親で異なるかどうかをみるために、父親と母親のファミリー・マップの尺度評定の平均値を比較した(表9)。同一家族成員(父親と母親)の同一家族に対する評定(わが家)の比較であるので、対応関係を調べてみた。両者の尺度得点と各項目評定点の相関係数を出した結果、②しつけの.29から⑩統一性.14の範囲であった。2群間にあまり相関があるとはいえず、両者の評定は対応のある2群であるとはいえない。そこで対応のない2群間の平均値の差の検定をおこなった結果、凝集性尺度得点および指導性尺度得点いずれも父親と母親の評定平均値に有意な差はみられなかった。尺度項目の結果では、凝集性尺度項目では⑨共有性の項目が、指導性尺度項目では③話し合いの項目評定点に有意な差が認められた($t = 1.99, p < .05$; $t = 2.57, p < .05$)。母親は、父親よりも家族成員が互いに時間・空間・興味など共有しあっていると感じているし、父親は母親よりも家族における話し合いの際に家族成員の発言に制限がなく個々人の意見が尊重されていると評価している。

表9 父親と母親・子どもの性別・子どもの年齢別の平均値と標準偏差

項目	続柄	父親	母親	子ども	子ども	子ども	子ども
		平均値(SD) (n=232)	平均値(SD) (n=232)	男性 (n=122)	女性 (n=370)	高校生以上 (n=363)	高校生以下 (n=129)
凝集性	⑥親密性	4.17(1.00)	4.11(1.12)	3.63(1.10)	3.76(1.05)	3.76(1.02)	3.64(1.17)
	⑦相互援助	4.22(0.94)	4.19(1.03)	3.75(0.94)	4.03(0.90)	4.01(0.92)	3.81(0.90)
	⑧意志決定	3.24(1.22)	3.28(1.22)	2.91(1.05)	2.91(1.09)	2.90(1.06)	2.93(1.14)
	⑨共有性	3.56(1.04)	3.75(1.01)	3.42(1.11)	3.40(1.06)	3.42(1.02)	3.37(1.20)
	⑩統一性	4.16(1.06)	4.15(1.03)	3.50(1.11)	3.54(1.05)	3.53(1.05)	3.54(1.11)
	凝集性得点	19.33(3.68)	19.50(3.75)	17.21(3.66)	17.64(3.63)	17.62(3.54)	17.29(3.89)
指導性	①リーダーシップ	3.18(1.21)	3.25(1.12)	3.52(1.22)	3.35(1.08)	3.36(1.11)	3.50(1.14)
	②しつけ	3.42(1.18)	3.31(1.03)	3.42(1.09)	3.29(1.08)	3.37(1.07)	3.19(1.08)
	③話し合い	3.94(1.07)	3.69(1.10)	4.02(1.15)	3.81(1.17)	3.85(1.14)	3.90(1.24)
	⑤価値観	2.81(1.04)	2.92(0.99)	3.41(1.09)	3.06(0.99)	3.07(1.00)	3.35(1.08)
	指導性得点	13.35(2.96)	13.17(2.66)	14.36(2.98)	13.51(2.79)	13.65(2.89)	13.94(2.77)

母親は父親よりも現実に家族成員の多くと生活空間を共有し交流し合う機会が多いのであろうし、家族成員間の融和をはかる役割(表出的役割)を担っていると認識しているため、父親よりも共有性が高いと評価しているのであろう。また、父親が実際に家族においてややもすると個人の意見に制限を加える役割(道具的役割)を担っているがそのことに無自覚になっているか、あるいは制限を加える人として家族成員に認識されているのではないかと感じているためそのことに対して防衛的評価(権力的ではない)をしていると考えられる。

(2) 子どもの評定したファミリー・マップの比較

家族成員のうち子どもだけを取り出し、凝集性尺度と指導性尺度の尺度得点および尺度項目評定点が性（男の子ともと女の子とも）および年齢段階（高校生までとそれ以後の年齢）の2要因2水準の分散分析をおこない検討をした。その結果、凝集性尺度得点では有意性がみられなかったが、指導性尺度得点においては、性の主効果が有意であった（ $F=7.18, p<.01$ ）。つまり、女子短大生のいる家族では、女の子どもの方が男の子どもよりも、より親の指導的傾向が強い家族だと認知しているといえる。尺度項目評定点で性の主効果が有意であった項目は、⑦相互援助（ $F=7.18, p<.01$ ）と⑤価値観（ $F=7.09, p<.01$ ）で、その傾向がある項目は、②しつけ（ $F=2.96, p<.10$ ）であった。女の子どもの方が男の子どもより相互援助の多い家族であると認知し、女の子どもの方が男の子どもより家族の価値観が決まりきっていて融通性がなく、しつけも厳しいと感じている。年齢段階の主効果が有意であった尺度項目は②しつけ（ $F=4.40, p<.05$ ）であり、その傾向があるといえるのは、⑤価値観（ $F=3.06, p<.10$ ）であった。高校生以下の年齢の子どもたちは、すでに高校を卒業してしまった年齢の子どもたちより、自分の家族は、しつけが厳しいと不満を感じ、高校を卒業してしまった子どもたちは親の考えが硬いと感じているようである。交互作用に有意差がみられた尺度項目は、⑧意志決定のみであった（ $F=3.89, p<.05$ ）。男子の成人した子どもと高校以下の女の子どもは、高校卒業してしまった年齢の女子や高校生以下の男の子どもよりも家族の意志決定を皆でするより個人にまかされていると感じている。

子どもの性別および年齢段階差によって家族評価がみられた。家族内における子どもの自立に対する期待や本人の自我意識の発達が性別や年齢段階によって違うことが根底にあると思われる。

(3) 親と子どもの性別でみたファミリー・マップの比較

父親と母親との間・子どもの性別・年齢段階に有意な差がみられる尺度得点や尺度項目評定点が存在した。そこで、尺度得点および尺度項目評定点について、親と子どもの組み合わせで分散分析を試みた。まず、父親・母親・男の子・女の子の4群について平均の差をみるための分散分析を行った。その結果、凝集性尺度得点および指導性尺度得点のいずれも4群間に有意差がみられた（ $F=27.64, p<.01$ ； $F=5.03, p<.01$ ）。どの群間に有意差があるかを分析するために比較（Schefféの方法）をした。その結果、凝集性尺度得点では、父親・母親共に男の子・女の子よりも高い平均値となった（父親×男の子： $F=8.86, p<.01$ 、父親×女の子： $F=9.98, p<.01$ 、母親×男の子： $F=10.36, p<.01$ 、母親×女の子： $F=12.12, p<.01$ ）。父親も母親も子どもよりは自分の家族の凝集性が高いと評価している。指導性尺度得点は、父親が男の子より指導性の高い家族であると評価している（ $F=3.37, p<.05$ ）。母親も同様に男の子よりも親の指導力が強い家族であると評価している（ $F=4.73, p<.01$ ）。また、女の子も男の子よりも指導性の強い家族であると感じている（ $F=2.74, p<.05$ ）。すなわち、男の子は、親よりも女きょうだいよりも指導性の弱い家族であると評価しているといえ

る。

尺度項目評定をみると、凝集性の尺度項目では5項目すべて4群間に有意差がみられた(⑥ $F=12.62$:⑦ $F=8.05$:⑧ $F=5.56$:⑩ $F=27.64$, いずれも $p<.01$)。⑥親密性, ⑩統一性は危険率1%で親が性別にかかわらず子どもより高い値をとり, 家族の絆が強いと評価している(F 値はいずれも5.10以上であった)。⑦相互援助の項目では, 父親・母親ともに男の子より家族の相互援助が多いと評価している($F=6.54$, $p<.01$: $F=5.95$, $p<.01$)。また, 女の子も男の子より家族の援助が多いと感じている($F=2.79$, $p<.05$)。すなわち, 家族内における相互援助に関する評価は, 男の子どもより他の成員が高いといえる。⑧意志決定の項目では, 女の子もが父親および母親より個人々で意志決定していると評価している($F=3.99$, $p<.01$: $F=5.09$, $p<.01$)。男の子どもは母親よりも意志決定を自分でできると感じている($F=2.83$, $p<.05$)。子どもたちは親よりも意志決定に対して個人でおこなっていると考えている。⑨共有性の項目では, 女の子もより母親の方が家族の共有性が保たれていると受けとめている($F=5.05$, $p<.01$)。

指導性尺度項目をみると, ①リーダーシップは4群間に有意差がみられたが($F=2.79$, $p<.05$), 対比較では有意差がみられた群間はなかった。⑤価値観は4群間に有意差がみられた($F=10.13$, $p<.01$)。対比較では, 父親は男の子どもや女の子もよりわが家に一貫した家族の価値観があると考えている($F=9.29$, $p<.01$: $F=2.80$, $p<.05$)。母親は男の子どもより自分の家族が変わらぬ価値観をもっているとみている($F=6.14$, $p<.01$)。女の子は男の子より家族の価値観の不変性を感じている。家族内では, 男の子どもが家族の価値観の不変性を中程度と評価しているのに対し, 親や女の子もはわが家には一貫した価値観があると信じている。

子どもの性別と父親・母親の4群で分析をした結果は, 親が子どもより家族の絆が強いと考え, 子どもは親より心理的に家族離れしていると感じている。また, 男の子以外は, 家族内の問題解決についてまだ親の指導性が必要であると感じているようである。

(4) 親と子どもの年齢段階別にみたファミリー・マップの比較

父親と母親と高校卒業した年齢段階の子どもと高校生以下の年齢段階の子どもの4群で分散分析をおこなった。その結果, 凝集性尺度得点の平均値は4群の間で有意な差がみられたが($F=21.11$, $p<.01$), 指導性尺度得点では, 4群間に差がみられなかった。

凝集性尺度項目別にみると, 5項目すべて4群間に有意差がみられた(⑥ $F=12.61$:⑦ $F=6.64$:⑧ $F=7.63$:⑨ $F=5.61$:⑩ $F=27.59$, いずれも $p<.01$)。⑥親密性, ⑩統一性は親が年齢段階をとわず子どもより高い値をとり, 家族の情緒的つながりが強いと感じている(F 値はいずれも5.10以上で $p<.01$)。⑦相互援助の項目では, 父親・母親ともに高校生以下の年齢段階の子より家族の相互援助が多いと評価している($F=4.93$, $p<.01$: $F=4.42$, $p<.01$)。⑧意志決定の項目では, 高校を卒業してしまった段階の子どもが父親および母親より個

人で意志決定していると評価している ($F=4.13, P<.01$: $F=5.25, P<.01$)。高校生以前の段階にある子どもは母親よりも意志決定を自分でできる家族であると感じている ($F=2.62, P<.05$)。(3)の結果と合わせてみると、性別や年齢と無関係に子どもたちは親よりも意志決定を個人でおこなっていると考えている。親よりも子どもの方が家族からの自律を自覚しており、一方、親たちはまだ子どもより家族は一体という考えが強いとかがえられる。⑨共有性の項目では子どもの年齢にかかわらず母親の方が自分の家族には家族成員間の共有性が保たれていると受けとめている ($F=5.05, P<.01$)。母親の役割意識が影響しているであろう。

指導性尺度項目をみると、①リーダーシップは4群間に有意差がみられたが ($F=2.71, P<.05$)、対比較では有意差がみられた群間はなかった。②しつけ、③話し合いは、4群間に差がみられなかった。⑤価値観は4群間に有意差がみられた ($F=8.76, P<.01$)。対比較では、父親は年齢段階の上の子どもおよび下の子どもよりも一貫した家族の価値観があると考えている ($F=3.11, P<.05$: $F=7.74, P<.01$)。母親は高校生以下の段階の子どもよりも家族が一貫した価値観をもっているとみている ($F=4.85, P<.01$)。親はわが家には一貫した価値観がありそれで子ども(特に高校生以下の段階の子どもに対して)を指導・教育していると考えているであろう。

3. 家族全体のファミリー・マップの分析

(1) 家族成員間の対応によってみたファミリー・マップ

家族成員のデータを家族内の役割や性別によって(父親・母親・男の子ども・女の子)個々に扱うのではなく、家族内の家族成員間同士の関係でファミリー・マップを分析した。まず、各成員間の尺度得点の関係を相関係数でみた。

表10 家族成員間の凝集性(左下段)・指導性(右上段)の相関係数
〔()内は、対応する組み合わせ度数〕

	父親	母親	兄	姉	私	弟	妹
父親		.26 ***	.15	.32 **	.32 ***	.19	.14
母親	.19 ** (232)		.39 **	.38 **	.49 ***	.46 ***	.42 ***
兄	.45 *** (62)	.48 *** (62)		.68 *	.41 **	1.00 *	--
姉	.27 * (69)	.53 *** (69)	-.01 (9)		.62 ***	.65	.25
私	.35 *** (232)	.52 *** (232)	.41 *** (62)	.52 *** (69)		.38 **	.54 ***
弟	.09 (60)	.48 *** (60)	.64 (3)	.62 (7)	.41 ** (60)		.96 **
妹	.26 * (69)	.23 (69)	-- (2)	-.39 (4)	.46 *** (69)	.73 (5)	

〔無相関の検定：*** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$ 〕

凝集性得点間の相関係数の検定の結果、有意確率が $p < .001$ 以下のものは、父親×兄・私、母親×兄・姉・私・弟、兄×私、姉×私、私×妹であった。この組み合わせは、同一家族の成員であり同じ家族に対する評価であり相関が高いと考えられるので、対応のある平均値の差の検定を、それ以外の組み合わせには対応のない平均値の差の検定を行った。その結果、父と姉を除く、親と子どもの間に有意差がみられ親の方が子どもより家族の凝集性に対して高い評価を与えた（いずれも $p < .001$ ）。子ども同士では、どの組み合わせにも差はみられなかった。指導性についても凝集性と同じような手順で検定を行った結果、父親と弟・妹（ $p < .05$ ）、母親と兄・弟（ $p < .001$ ； $p < .01$ ）、私と妹（ $p < .05$ ）の間に有意差がみられ、前者が後者よりも指導性尺度得点が低かった。同一家族内の成員間において、父親が高校生以前の子どもより指導性が強い家族だと評価し、母親は、男性の子どもと比べて指導性の高い家族であると評価している。いいかえれば、父親は低年齢層の子どもに母親は男の子に自分の影響力を発揮していると過信しているとも考えられる。

(2) 家族単位でみたファミリー・マップ

家族成員全員データを一つの家族全体のものとして取り扱うために、各家族ごとに全家族構成員の尺度得点の平均を算出した。その結果、図5のようになった。

家族全員から判断されたファミリー・マップとそれに影響を与えると考えられる要因との関連をみた。

ファミリー・マップの尺度得点を家族構造すなわち2世帯家族と3世帯家族の間で比較したが有意な差はみられなかった。

家族成員の人数（3人、4人、5人、6～7人）間においても有意差はみられなかった。

家族構成パターンを女子短大生が一人っ子、末っ子、中間子、長子の分類で分散分析をおこなったが、両尺度いずれも差がみられなかった。

父親の職業（被雇用者、会社役員、自営業）の違いによっても、ファミリー・マップには差がみられなかった。

母親の職業（被雇用者、自営業、無職：会社役員を除く）の3群で分散分析を行った結果、凝集性尺度では差がみられなかった。しかし、指導性尺度では、3群間に差がみられ〔平均値と標準偏差：被雇用者群14.26 (2.41)、自営業群13.15 (1.81)、無職群13.43 (2.02)] ($F = 3.05$, $p < .05$)、各群間を対比較すると、被雇用者群が自営業群および無職群より指導性得点の平均値が高い傾向があった ($df = 2, 223$ $F = 2.62$, $p < .10$ ； $F = 2.35$, $p < .10$)。母親が被雇用者として共稼ぎしている家族では、自営業や無職で日頃わりに子どもの身近に母親のいる家族よりも指導性が低く子どもの自由をより認めているようである。

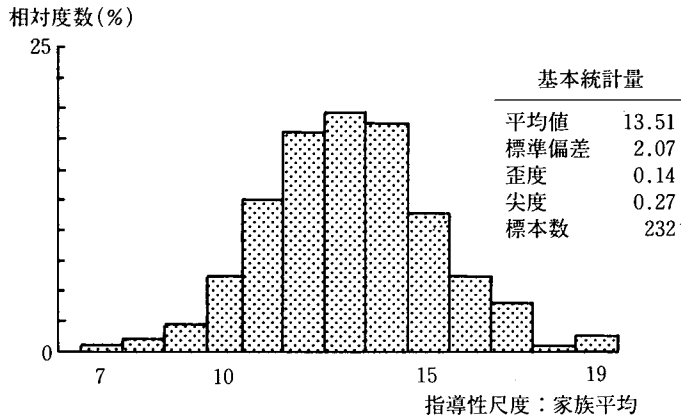
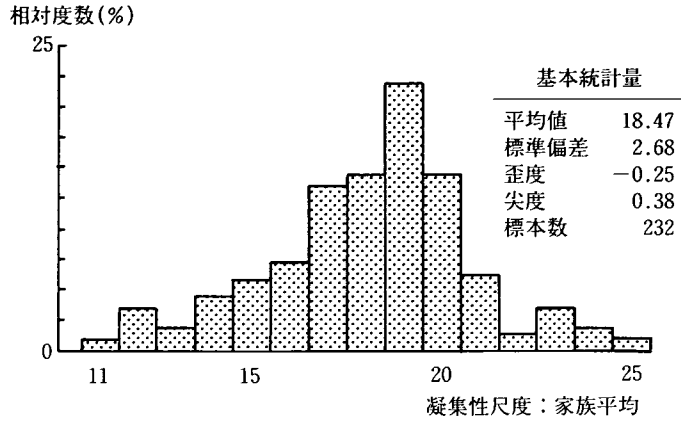


図5 家族平均点の分布と基本統計量

IV ま と め

1. 円環モデルに基づくファミリー・マップの尺度の検討

ファミリー・マップの尺度の検討を因子構造や尺度間相関および主成分分析でおこなった結果、親密性、統一性、相互援助、共有性、意志決定の5項目で構成される凝集性尺度、リーダーシップ、しつけ、話し合い、価値観の4項目で構成される指導性尺度が新たに再構築された。

尺度の特徴としては、指導性尺度が、円環モデルでいう適応性概念すなわち個人の自立や個人の尊重を基盤とした家族成員間の問題解決システムよりは、親主導型の問題解決システムとしての家族を評価しているといえる。西欧的家族システムと日本的家族システムの比較検討と共に日本特有の家族評価のモデルを構築していく必要がある。

2. 家族成員のファミリー・マップ

父親と母親のファミリー・マップを比較したところ、凝集性尺度項目の共有性の項目に対して父親より母親の方が高い評価をした。指導性尺度項目の話し合いに対しては、母親より父親の方が家族における話し合いの制限がないと評価した。

子どもの性別と年齢段階（高校生以上と以下）の2要因2水準の分散分析の結果、意志決定においては交互作用がみられた。指導性尺度得点に性別の主効果が有意であり（女子の方が男子より家族の指導性が強いと評価している）、尺度下位項目では相互援助、価値観に有意差があり、傾向のあった項目がしつけであった。

親と子どもの性別でみたファミリー・マップを検討した。父親母親ともに性別に関係なく子どもより凝集性の高い家族であると評価した。男の子は、親よりもまた女きょうだいよりも指導性の弱い家族であると評定している。

親と子どもの年齢段階別にみたファミリー・マップの比較では、親が子どもより自分の家族は凝集性が高い家族であると評価している。

3. 家族全体のファミリー・マップ

同一家族内の家族成員のファミリー・マップを比較するために、家族成員間を対応させてその関係をみた。2.と同じように両親ともに子どもより凝集性の高い家族であると評価した。また、同一家族内の成員間において、父親が高校生以前の子どもより指導性が強い家族だと評価し、母親は、男性の子どもと比べて指導性の高い家族であると評価している。

同一家族の成員の平均値を家族のファミリー・マップとして、その影響要因と考えられる家族構造、家族成員の人数、家族構成パターン、父親の職業の違いによって比較したが、いずれもファミリー・マップには差がみられなかった。

母親の職業（被雇用者、自営業、無職：会社役員を除く）の3群で分散分析を行った結果、指導性尺度では、3群間に差がみられ、被雇用者群が自営業群および無職群より指導性得点の平均値が高い傾向があった。母親が被雇用者として共稼ぎしている家族は、自営業や無職で日頃なりに子どもの身近に母親のいる家族よりも指導性が低いことが明らかとなった。

文 献

- 1) カーンズJ. 野田雄三・竹内吉夫（訳）1987 ファミリー・コミュニケーション 現代社 (Carnes, P. J. 1981 Family Development I: Understanding US. Interpersonal Communication Programs, INC.)
- 2) 黒川潤 1990 円環複合モデルに基づく尺度（和訳版）の標準化の試み：家族満足度、親—青年期の子どものコミュニケーション、FACES IIIについて 家族心理学研究 4, 71-81.
- 3) NHK 世論調査部 1984 中学生・高校生の意識 日本放送出版協会
- 4) NHK 世論調査部 1985 現代人の意識構造（第二版） 日本放送出版協会
- 5) 岡堂哲雄 1986 成人期のファミリー・プロセス 家族心理学年報4（ライフサイクルと家族の危機） 金子書房
- 6) Olson, D. H., Sprenkle, D. H. and Russell, C. S. 1979 Circumplex Model of Marital and Family Systems. I: Cohesion and Adaptability Dimensions, Family Types, and Clinical Applications. Fam. Proc.

- 18: 3-28.
- 7) Olson, D. H., Russell, C. S. and Sprenkel, D. H. 1980 "Circumplex Model of Marital and Family Systems. II: Empirical Studies and Clinical Intervention," in J. P. Vincent. (Ed.) *Advances in Family Intervention, Assessment and Theory* Vol. 1, p129-179. Greenwich, Conn., JAI Press.
 - 8) Olson, D. H., Russell, C. S. and Sprenkel, D. H. 1983 *Circumplex Model of Marital and Family Systems. VI: Theoretical Update*. *Fam. Proc.* 22: 69-83.
 - 9) Olson, D. H. 1986 *Circumplex Model. VII: Validation Studies and FACES III*. *Fam. Proc.* 25: 337-351.
 - 10) Olson, D. H. 1989 "Circumplex Model of Family Systems. VIII: Family Assessment and Intervention." in Olson, D. H., Russell, C. S. and Sprenkle, D. H. (Eds) *Circumplex Model; Systemic Assessment and Treatment of Families*. 7-46. The Haworth Press.
 - 11) 大塚美和子・立木茂雄 1991 Clinical Rating Scale によるオルソン円環モデルの実証的検証 家族心理学研究 5, 15-32.
 - 12) Russell, C. S. 1979 *Circumplex Model of Marital and Family Systems. III: Empirical Evaluation With Families*. *Fam. Proc.* 18: 29-45.
 - 13) Sprenkle, D. H. and Olson, D. H. 1978 *Circumplex Model of Marital and Family Systems. IV: Empirical Study of Clinic and Non-Clinic Couples*. *J. Marr. Fam. Council.* 4: 59-74.
 - 14) 清水新二・高梨薫 1990 アルコール依存症の家族システムとその変化 家族療法研究 7, 3-13.
 - 15) 武田丈・立木茂雄 1991 オルソン円環モデルの構成概念妥当性の検証に関する方法論的研究 家族心理学研究 5, 33-51.